地質ニュース617号，57－70頁，2006年1月
Chishitsu News no.617, p.57－70, January, 2006

ライマン雑記（21）

副　見　恭　子[1)]

1. 世紀末

1887年7月，ベンジャミン・スミス・ライマン（1835-1920）は，第二次ペンシルベニア地質調査に参加するため，ノースハンプトンからフィラデルフィアへ移った．彼が51歳の時である．ノースハンプトンにある赤れんがの家を人に貸し，翌年の暮れ，ローカスト ストリート708番地に仮の居を構えた．便利で気楽な暮らしが始まるが，この質素な住まいで，よもや33年近くを過ごすとは，思っていなかったであろう．

1890年から1899年までのアメリカ社会史は，激動の十年として語られている．金ピカ時代が終わり，ヨーロッパから移民が押し寄せ，労働市場が溢れると，あちこちに組合運動，ストライキ，デモ，労働争議等が起こり，1893年に恐慌，5年後に米西戦争（1898年アメリカとスペインの間で行われた）と，数々の激しい変動が続き，ライマンの生活にも多かれ少なかれ影響したようである．個人的には，病のために，伯父ピーター・レスリーのペンシルベニア地質調査所長辞任，石炭埋蔵地の購入，Toku（中嶋徳松）の失踪等の出来事が数えられるが，なんと言っても，炭鉱経営の失敗は，大打撃であったに違いない．しかし，ライマンが悠然として事実を受け止め，ひるまず一歩ずつ前進して行ったところに，筆者は彼の真価を発見したような気がする．

2. ローカスト ストリート708番地

佐川栄次郎は「ライマン氏を憶ふ」（佐川，1921）で，明治44年（1911）春，ライマンを訪問した思い出を語り，「Franklin Square小公園の一隅なる，低き赤煉瓦三階の粗末なる長家」とローカスト ストリートの住居を描写している．公園はWashington Squareの間違いである．ライマンが住み移ってから約25年の歳月が経っていた．当然，佐川の目には，古色蒼然な家に映ったのであろう．

19世紀末のローカスト ストリートには，まだ昔日の瀟洒な面影が残っていた．ワシントン スクエアのすぐ側に三階建ての煉瓦家が並び，ライマンはその一棟の二階に住み，階下はすべて英国領事館オフィスと領事の住宅で占められていた．ベスン・マッカーテーへの1897年6月24日の手紙で，ライマンは，ビクトリア女王即位50年記念日の際，領事が彼の許可をえて，二階までデコレーションやイルミネイションでビルを飾って祝ったと書いている．当時のローカスト ストリートの雰囲気が感じられる．

筆者は，佐川栄次郎の訪問から約85年後の1996年の夏，ローカスト ストリートを訪れた．三階建ての粗末な煉瓦の家は跡形もなかったが，思いがけなく至る処でライマンの姿を彷彿する経験をした．

ワシントン スクエアを西南へ横切るとビル街に出た．歴史を語る古い建物が並び，間もなくして，ベンジャミン・フランクリンの印刷機発明によって次々に開花した印刷，出版会社の群れであることに気が付いた．ビルは未だ偉観を失わず，費府（ひふ）と日本人に親しまれたフィラデルフィアの全盛期の名残をとどめていた．ライマンの数多い著作や蔵書の大部分がフィラデルフィアで出版されていることが納得できる．彼がこの通りを歩いたのだと思うと，全身に感動が湧いた．更に先へ行くと，専門図書館，博物館，教会等の文化街に変わり，やがて独立宣言を行った独立記念館へ着く．現在は，フィラデルフィア史跡ツアーの一つ，ワシントン スクエア（第1，2図）から独立記念館までの徒歩コースとして，印刷出版の歴史愛好者たちに評判が良い．ライマンの老年期と晩年は物質的に恵まれなかったが，このすばらしい環境の下，彼がどんなに心

1）元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書：8 Eaton Court Amherst MA 01002 U.S.A.

キーワード：ライマン，フィラデルフィアの日本人，Shippen & Wetherill，中嶋徳松

第1図　ワシントン スクエアの銘板.

第2図　ワシントン スクエアの公園内.

豊かな生活を送ったかをはかり知ることができた.

ローカスト ストリートの家の内部を知るために, 筆者は, あちこちからの資料を組み合わせて想像してみた. 赤煉瓦の三階建ての家の二階に上がり, ドアを開けると, すぐライマンの事務所で, 隣の狭い部屋が彼の寝室である. そして, 天長節や新年に日本人留学生と祝杯をあげた広い部屋が奥にあり, 計三室からなっている.

19世紀末の日本人留学生のアメリカ生活は, 貧困と苦難の明け暮れだった. アメリカの庶民は, 日本の存在すら知らず, 東洋人全般を見下げるような人々が多かったし, 言葉のハンデ, 文化の大差, 大陸気候の厳しさ, 人種への強い偏見等数えれば切りがなかった.

ライマンの家は, 彼らにとって別天地であったに違いない. 日本の書画骨董が並ぶ部屋で, 日本語で気楽に, 母国の四季, 食べ物, 草花, 祭りなどの思い出話に花を咲かせるひと時は, 留学生にとってどんなに楽しかったであろう. それにもまして, 彼らが感激したのは, ライマン先生の日本と日本人を愛する心であったと思う. ライマンには, 日本人への偏見が一かけらもなかった. まさしく不安, 悩み, 心痛を癒してくれる憩いの場所であった. 1894年1月, 留学生16人がライマン先生を囲んで写真(第3図)を撮り, 感謝のしるしとして寄贈している.

しかし1898年の夏, 日本クラブが再組織されることになった. やがて会員制になり, 毎月の寄付は25セントと変わらないが, 高い会費を納める公式的なクラブが誕生した. その折りに, 新会員から100ドル以上を集め, 笠置艦の進水式を祝い, 銀杯を贈った. ライマンは納得できず, 以前日本クラブの中心人物で, ペンシルベニア大学の哲学博士号を取って帰国した誠実な杉浦貞二郎へ「このような変化に歩調を合わせる気になれない. 完全なアメリカ化とは言えないが, 近代文化を身に付け始めた日本の若者たちは変わってしまった」と訴えている. ライマンのブドウ酒一杯に喜んだ勤勉, 素朴で, つつましかった日本留学生を懐かしみ, 変化を認めながらも受け入れることができなかったのだと思う.

第3図　日本人クラブ会員の写真. 中央にライマン, 一番左上が中嶋徳松(マサチューセッツ大学図書館所蔵).

当時，フィラデルフィアは，造船業の全盛期であった．日清戦争で勝利を博した日本は将来に備え海軍を強化するため，アメリカと英国の造船所に軍艦を注文した．富国強兵のスローガンの下，日本は世界の強国に列しようと躍進して行く．

3. フィラデルフィアの日本人

約30年の時の流れのなかで，二階への階段を上がって，ローカスト ストリート708番地のライマンの事務所兼住まいを訪れた人々の数は限りなく，千差万別であった．移った当初は，第二次ペンシルベニア地質調査に関係する人，地図や目録作りを手伝う通いの若者，スクイルキルの調査地からやってくる調査員でにぎわった．時には，伯父J.P. レスリーの姿も見られたであろう．

Tokuが1890年にペンシルベニア大学に入学すると，日本人留学生の訪問が目立ち，数年後には，ビジネス，技術関係の日本人訪問客の行き来が激しくなった．その中から，留学生の梶原長八郎，松本君平，はかない人生を終えた松尾トキワ達，また当時珍しい日本人放浪者を選び，海外明治人の姿を描いてみたい．

梶原長八郎

梶原長八郎（第4図）は会津若松城下に生まれ，ライマンの助手であった伯父山際永吾と同じく，実直，誠実，謙虚，温情に秀でた会津人気質を持っていた人である．

梶原は明治21年（1888）11月27日，朝9時30分，前日ノースハンプトンの家を訪れた折入手したライマンのフィラデルフィアのアドレスをしっかり握って，ひょっこりローカスト ストリートのライマンの家に現れた．ライマンは，話しているうちに，彼が7年間アメリカに滞在する計画で，来夏に日本から送金が始まるまで何か仕事があればと希望しているのを知り，早速自分がやっている日本関係の仕事を手伝ってもらうことにした．翌年，Tokuが最後のハイスクールの夏休みをライマンと一緒に過ごすためフィラデルフィアにやってきた頃には，梶原は地質調査の助手として，毎日6時間半働いていた．彼は，Tokuに標本ラベルを貼って分ける仕事を教え，日本人訪問者の面倒，市内の案内，更にライマンが刀剣に凝りだすと，取り扱いや鑑定，日本文化の紹介にもたずさわった．ライマンの1890年初期の日記にMr. Kajiwaraの名が度々出てくる．彼はライマンの欠くべからざる助手であり，信頼する友であった．明治24年（1891）梶原は，牧師になるためニュージャージー州にあるプリンストン大学で神学を学ぶ決意をし，フィラデルフィアを去った．

第4図　梶原長八郎（佐治健治郎蔵）．

ライマンは，成人してから教会に通わず，無神論者として知られている．Tokuがブルアー姉妹の影響で熱心なユニテリアン教徒（キリスト教プロテスタントの一派）となり，彼の牧師がTokuを日本へ宣教師として送ったらとライマンに相談した時，Tokuがまだ未熟な年なので判断ができないことを理由に，きっぱり断っている．また貧困を極めた安達仁造が宣教師の勧誘に心が動いた時も，反対意見を述べた．

彼が生まれ育ったノースハンプトンの人々が，1792年，カルビン派（キリスト教プロテスタントの一派）の世界的な大宗教家ジョナサン・エドワーズを追放した話は有名である．“我々は怒りの神の御手にある”と神の権利を絶対にし，個人の自由意志を否定する教義を，知性に富み，教養深いノースハンプトンの彼らは，受け入れることができなかった．1892年ライマンの祖父母の支持で，キリストの倫理道徳を重んじるユニテリアン協会がノースハンプトンに設立された．現在も毎年ヒロシマ原爆の日にその協会で平和の祈りが捧げられている．

梶原長八郎は，会津戦争で会津藩の一方の隊長で

あった父を失い，時に僅か3歳．落城後朝敵の汚名を背負って，会津人と共に筆舌に尽しがたい艱難辛苦をした．彼は，悲惨な境遇にある会津人たちを一時も忘れなかったのではないだろうか．アメリカにやってきて約3年間熟考した結果，彼らを救うため，牧師の道を選んだと思えてならない．安易な宗教に厳しかったライマンは，梶原の高邁な心，強い決意，そして仁愛に胸を打たれ，諸手をあげて賛成し，彼の第二の人生の門出を祝ったに違いない．明治30年(1897)梶原長八郎は，約9年間にわたるアメリカ滞在に終止符を打ち，6月の末，立派な長老教会牧師として故郷会津へ帰った．後々までライマンは，彼が大変心のやさしい人であったことを，人々に語っている．

梶原長八郎は，明治31年(1898)若松城落城の30年後から明治38年(1905)まで，会津若松日本キリスト教会講義所で伝道．明治34年(1894)仙台の東北学院に招かれて神学部教授，また理事となり，昭和2年(1927)没するまで36年間キリスト教伝道と教育に力を注いだ．即ち東北学院2代目シュネーダー院長を支えて，学院の興隆時代(1901-1930年，学院百年史)に貢献すると共に，同志社系の会津若松組合教会(同志社創立者新島襄の夫人八重子は，白虎隊の少年達に操銃を教え，会津籠城の苦しめをなめた女丈夫)と友情を深め，会津キリスト教伝道に協力して尽力するなど，東北キリスト教史に大きな足跡を残した．(注1)

松本君平

ライマンは，1890年8月31日，ローカスト ストリートの家へ新渡戸稲造，寺島誠一郎，津田梅子，串田萬蔵，岩崎久弥等，フィラデルフィアの日本人を招いた．次に紹介する松本君平の名はリストに見られない．

彼は，1893年，ペンシルベニア大学に一年間留学中，日本人クラブに出席し，ライマンの立派な人格に感じ入り，終生文通した人である．翌年，ロード アイランド州にあるアイビーリーグ名門校ブラウン大学に戻り，修士号を得て帰国した．ライマンは遠江(静岡)出身の松本の都会人にみられない気骨を好み，ひとかどの人物，興味ある人間と注目した．当時彼は，Julius Kumpei Matsumotoと名乗っていた．ジュリアスシーザの伝記を訳し，明治24年(1891)“英雄経”の題名で出版し，日本ではすでに文筆家として知られていたようである．

1896年に，松本君平が自由党機関誌「東京新聞」の編集長，雑誌「大日本」の編集員として日本で活躍しているニュースをライマンは受け取った．更に翌1987年，彼は伊藤博文の秘書として，ビクトリア女王即位50周年記念式典に出席する途中，アメリカに立ち寄っている．驚くべき飛躍的な出世である．伊藤よりも1週間長く留まり，ワシントンでジョン・シャーマン国務長官や議員たちに会い，当時問題となっていたハワイ合併論に関する伊藤の平和的意見を伝えた．彼は寸時の暇をみて，ローカスト ストリートを訪れ，ライマンと再会した．伊藤博文の立憲政友会の誕生，日清戦争，日英同盟，日露戦争，ハルビンでの伊藤の非業の死，大正時代のスタート，第一次世界大戦と日本の近代国家の歩みを目撃した彼は，再び最後の飛躍を成している．

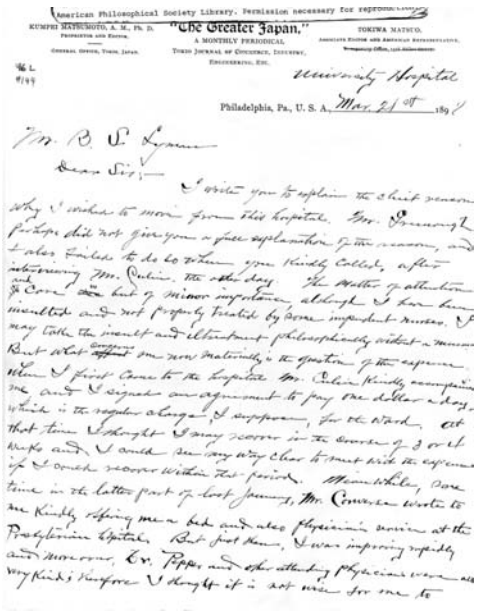
ライマンは，死去する3年前の1917年(大正6)に松本から長い手紙を受け取った．松本がフィラデルフィアを去って以来，23年の長い歳月が過ぎても，深く心に刻まれた思い出では鮮やかであり，数日前も数は少なくなったが，フィラデルフィア時代の仲間と集まり，彼の音頭でライマンの健康を祝し乾杯をしたと書いている．

ライマンは，松本が7年前に政治から退き，4年前に野に下り，今やアジア青年宗教協会を設立して，世界宗教の統一を目指して，朝鮮，支那，蒙古，シャム，インドを飛び歩いていることを知った．残りの人生をアジアに捧げようとする情熱は，フィラデルフィア時代に新しい日本憲法を訳してくれた意気軒昂であったJulius Kumpei Matsumotoとなんら変わってはいないと，ライマンは往年を回顧し懐かしがったであろう．

松尾トキワ

近くに石炭と石油の大産地を有するフィラデルフィアは，1800年，首府をワシントンに譲ったが，1890年代に大工業都市となった．並列する煉瓦街と林立する煙突の眺めは壮観であったが，歴然と繁栄と貧困の表裏が存在していた．大気汚染による弊害は顕著で，不健康な環境のため胸を病む人が多く，ジフテリ

注1　帰国後の梶原長八郎(佐治氏の叔母佐治塩子の父)の歴史は，佐治健治郎氏の執筆．なお佐治氏は中学2年から兵役につくまで，仙台梶原氏の屋敷内で佐治秀松・塩子夫妻に育てられた．


American Philosophical Society Library. Permission necessary for reproduction.

KUMPEI MATSUMOTO, A. M., Ph. D.
PROPRIETOR AND EDITOR.
GENERAL OFFICE, TOKIO, JAPAN.

"The Greater Japan,"
A MONTHLY PERIODICAL.
TOKIO JOURNAL OF COMMERCE, INDUSTRY, ENGINEERING, ETC.

TOKIWA MATSUO.
ASSOCIATE EDITOR AND AMERICAN REPRESENTATIVE.
PRINCIPAL OFFICE, 1416 CHESTNUT ST.

No. L.
8/99

University Hospital
Philadelphia, Pa., U. S. A. May 21st 189

Mr. B. S. Lyman
Dear Sir,—

I write you to explain the chief reason why I wished to move from this hospital. Mr. Converse perhaps did not give you a full explanation of the reason, and I also failed to do so when you kindly called, after interviewing Mr. Dulin, the other day. The matter of attention I have been but of minor importance, although I have been neglected and not properly treated by some important persons. I may take the incident and illustrate philosophically without much more. But what ~~affect~~ one new material is the question of the expense. When I first came to the hospital Mr. Dulin kindly accompanied me and I signed an agreement to pay the dollar a day, which is the regular charge, I suppose, for the ward. At that time I thought I may recover in the course of 3 or 4 weeks and I could see my way clear to meet with the expense if I could recover within that period. Meanwhile, some time in the latter part of last January, Mr. Converse wrote to me kindly offering me a bed and also physician's service at the Presbyterian Hospital. But just then, I was improving rapidly and moreover, Dr. Pepper and other attending physicians were so very kind to me that I thought it is not wise for me to

第5図　松尾トキワからライマンへの手紙の一部.
（フィラデルフィア自然科学院図書館蔵）

ア，コレラ等の疫病が流行すると，恐怖の市と変じた．日本人は異国の厳しい生活に順応できず，客死する人が少なくなかった．

松尾トキワは，ボールドウィン機関車工場で働きながら，ペンシルベニア大学へ通っていた．また松本君平が発行する「The Greater Japan」の編集者兼代理人でもあった．ライマンは，独創的で聡明，やる気満々の彼に目をかけていたようである．1898年の夏にはいよいよ卒業で，明るい将来が待っていたが，突然，年の始めに松尾は大学病院に入院することになった．ライマンは，暇をみては彼を見舞い，励まし，力となっていたが，彼のブライト病（腎臓炎の一種）は一進一退であった．ライマンが受け取った彼の3月21日の手紙（第5図）を読むと，淀み無い英語ですらすらと書かれた文章から，苦しい立場にありながら，彼の素直さ，思慮深さ，しかも冷静さが感じ取られる．しかし，凛とした中にも心細さが潜在することも否定できない．大要を書いてみる．

お見舞いに来て下さった時は充分にお話ししませんでしたが，この手紙で，何故私がこの病院を出たいのか，はっきり説明いたします．病院での看護婦達の振る舞いはさほど気にしていません．憂慮しているのは，病院の費用なのです．入院した時，毎日1ドル払う事に同意しました．これは，共同病室の規定料金です．私は3，4ヶ月で回復すると思い，契約書にサインしました．1月の末，ミスター コンバースから，親切に私を長老教会病院へ世話をしようとの話がありました．当時は，だんだん良くなってきていましたし，ここのドクター ペッパーや掛かり付けのお医者さんたちが大変よくしてくださるので，病院を出るのは賢明でないと思いました．さらに，もうすぐ元気になると思い，ミスター コンバースの寛大な申し出をお断りしたのです．それから2ヶ月余り過ぎ，入院してから3ヶ月以上経ちましたが，何時回復するか未だ判りません．もし数ヶ月ほどなら，ここにいたいのですが，長引くのならば，資力がなく費用を払う当てがありません．この問題を，是非解決したいと切望しています．寛大な方の親切を利用するつもりはありませんが，今は，ミスター コンバースの親切を受けたいと思うのですが・・・是非あなたのアドバイスをいただきたいと思います．

4月に，ライマンとドクター ペッパーの話し合いで，入院費が無料になって一段落して安心したのも束の間，5月6日松尾トキワは死去した．ライマンがその夜遅くなってフィラデルフィアに戻ると，松尾が午後死去したとの杉浦の通知が待っていた．またその側に，松尾が大変衰弱しているので，病院に来てくれないかと書いたドクター エジソンの電報が置かれ，届いた時刻が1時15分とあった．ライマンは，留守をしていて松尾の死際に会えなかった無念を長い間忘れることが出来なかったようである．

日本人放浪者

ライマンが妹メリーへ書いた1897年11月21日の手紙の中のローカスト ストリートの家に現れた日本人放浪者に関するエピソードは，なかなか興味深い．鉄道全盛時代の放浪者は白人と決まっていた．珍しい話であり，また，ライマンを始めとして，フィラデルフィアの温かな人々の行動が印象的であった．

木曜の晩，協会の集まりがなかったので，隣のミセス ヘンリーに下宿している日本の友達を久しぶりに訪ね，7時20分に帰宅するや，ドアの

第6図　現在のフィアデルフィア市13番ストリートとローカストの角．建物はペンシルベニア歴史協会．

ベルが2回鳴りました．ドアを開けると，ポリスマン，若いアメリカ人と日本人の若者が立っていました．瞬間フィラデルフィアで初めての日本人浮浪者だと思いました．若いアメリカ人は，私立慈善診療所の助手で，ここからさほど遠くないスラム街の家を訪れていたところ，日本人放浪者と会い身ぐるみをはがされてはと，彼の身の危険を心配し手助けを申し出たのです．

ポリスマンの受け持ちが私の地域の近くだったので，私のアドレスを確認しました．放浪者は，覚えあるきちんとした筆跡で書かれた紙を2枚持っていて，1枚は，13番と15番ストリートの市街電車の車掌に，歴史協会の建物が立っている13番ストリートとローカストの角（第6図）で彼を下ろすように，もう1枚には，私の名とおおよそのアドレスが書いてありました．

放浪者は，サンドイッチ諸島（ハワイ諸島の旧名）の砂糖きび園で6ヶ月働いていましたが，そこに留まっていても，成功しそうにも無いと思い，水夫になり，3ヶ月航海して，ニューヨークにやってきました．1ヶ月経っても仕事が見つからず，今度は，サンフランシスコへ行きたいと無銭旅行を企て，汽車，多分貨物列車でフィラデルフィアに来たのでしょう．彼は，ポリスマンに何処かに日本人がいないかと尋ね，2つのアドレスを手にしたのです．私は，ミセス ヘンリーのところへ一行を連れて行き，下宿人の二人の日本人と相談しました．彼らがどうしたらよいかわからず，途方にくれていると，ポリスマンは遂にしびれを切らし，放浪者を一晩だけ警察署へ連れていき，明朝，日本人二人が7時から8時までの間に引き取りに来ることを提案しました．彼らは，その夜のトラブルが一時だけでも解決できたことを喜び，明日は明日でうまくゆくだろうと安心している様子でした．

彼らが，再びこの事件にかかわりたくないのではと疑っていたので，翌朝，7時40分にミセス ヘンリーの下宿へ行くと，まだ二人が起きていないことがわかりました．事情を話すと，厳つい風貌にもかかわらず，心のやさしい彼女は，放浪者に簡易ベッドを提供し，1，2日寄食させてもよいと言いました．更に，彼女のレストランで働いている黒人に充分満足していないので，場合によっては，雇ってもよいと主張しました．

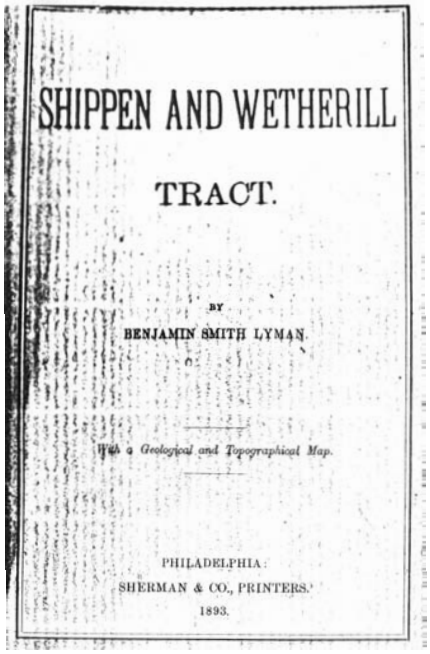
私が急いで警察署へ行くと，善良なポリスマンが，放免手続きをしていました．放浪者は，錠なしの独房で本を読んでいたのでよく見ると，日本語の英語学習本でした．彼は，少ししか英語がわかりません．恐らく地方か，農家出の若者でしょう．

ミセス ヘンリーの台所で，彼女が並べた朝食をむさぼる放浪者を残して帰宅しましたが，再びどうしているか様子を見に行きました．彼女は，11時頃，日本人二人が何事もなかったような顔で現れたので，あわれな同国人への義務について説教したそうです．しかし，彼らはここでは仕事が全くないとみて，ニューヨークへ送り返そうと考えました．私は，彼らの場合と違い，肉体労働の仕事ならいくらでもあると力説しました．

夜になって，またミセス ヘンリーを訪れると，彼女は放浪者を雇う計画をし，最初に，彼に是非公衆浴場へ行くよう強調したことを話してくれました．しかし日本人が正午に彼に汽車の切符を与え，ニューヨークに戻すプランを実行したのです．これでエピソードは終わりです．

彼女は，話し終わると，私の背後にあった大きなリンゴとぶどうに気付き，声を高めてそれらを指しながら，少し家へ持って帰るようすすめました．私が彼女のため労をとったことに感謝を示したかったのです．

過去14年間，クリスマスに，7番ストリートとスプルース街の間にあるカソリックの孤児院の子


SHIPPEN AND WETHERILL

TRACT.

BY

BENJAMIN SMITH LYMAN.

With a Geological and Topographical Map.

PHILADELPHIA:
SHERMAN & CO., PRINTERS.
1893.

第7図　Shippen and Wetherill Tractの表紙.

> 供達を彼女の家に招き，喜びを分かち合う事が彼女の唯一の楽しみであると，それとなく話してくれたことがあります．最初の日本人の下宿人，ミスター梶原（長八郎）が軽い病気をした時も，とても親切に世話しました．始めはとっつきにくくみえますが，本当に温かな心を持った人です．

珍しくライマンの人柄がにじみ出る手紙に出合った．生き生きとしたライマンの像である．

4. Shippen and Wetherill Tract

ベンジャミン・スミス・ライマンの心を奪ったシッペン アンド ウェザリル石炭埋蔵地（以後S & W tractと記す；第7図）は，彼が20代の頃から親しんでいたペンシルベニア州東部の無煙炭地帯にあった．

ライマンの助手賀田貞一が，1882年から1883年にかけて約6ヶ月間，第一次ペンシルベニア地質調査に従事した地域である．手記『米国地質測量記事』で，彼は「ペンシルバニア州ノ如キハ西部ニ瀝青煤ノ産地アリ其東部ニハ世界無比トモ云フベキ無煙煤ノ潤大煤田アリ…」（賀田，1884）と書いている．雄大なアパラチヤ山脈，広大な渓谷地域の南に位置し，当時，フィラデルフィアから発する長距離鉄道がすでに敷設されていた．青年期から頻繁にこの鉄道を利用していたライマンは，沿線の炭鉱地区はもちろん各駅における石炭の積み込み状態，関連会社の所在，運営，実情等を熟知していたのは当然であろう．

1892年4月に，ライマンはオプション（選択売買権）を取得し，数回地質調査を共にしたA. D. W. スミスや，調査所の若い助手たちとS & W tractの調査を開始した．この石炭埋蔵地に関心を持った人々は少なくはなかった．過去に試みられたケンタッキーバンク炭鉱とよばれたマンモス炭層の鉱区には，未だ放棄された旧坑の残骸が所々にみられた．

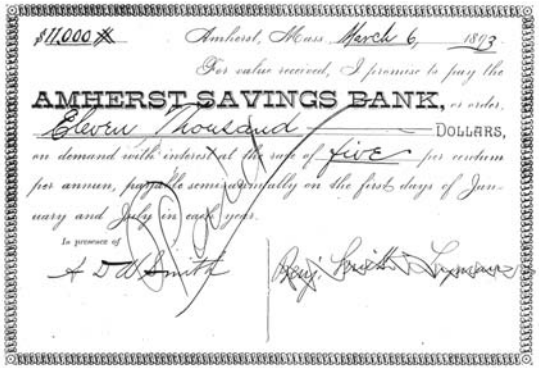
翌1893年，ライマン著『Shippen and Wetherill Tract』が出版された．36ページのパンフレットに過ぎないが，彼らしい綿密にして簡潔な説明書である．S & W tractの位置，地質，炭層，採掘可能な石炭の概要，採掘と積み出しを記述し，地図と断面図を加えた小冊は，一目瞭然，一息に読むことができる．

例えば約208エーカーのS & W tractの土地について，次のような説明がある．「…地域は肉切り大包丁型を成し，長柄は北東，南東にある巾広い刃は南西に向き，柄の長さ900ヤード，巾600ヤードで，西へ次第に狭くなり，全長1マイル4分の1」と描写しいて，素人にも判りやすい．

筆者は，本文の末尾のマンモス無煙炭層上の礫岩に関する小文に特に注目した．鉱山技師協会会報から引用された文であるが，スクイルキルバレー（盆地）集会，リーディング，10月，1893と記しているところから，市の集会で講演した草稿であろうかと思われる．先ず最初に，この地方で長い間信じられていた“礫岩の下には，石炭は存在せず”の言い伝えを否定し，調査の結果，S & W tractにあるマンモス炭層は，礫岩の下に埋まっているにもかかわらず，多くの良質石炭を埋蔵していることを力説した．ドイツのフライブルグ王立鉱山学校とパリ国立鉱山学校で学んだライマンの自信のほどが感じられる．1859年，伯父J. P. レスリーがペンシルベニア大学に鉱山学講座を開いて以来，調査に従事する若者たちは鉱山地質学を身につけ，炭田の成因に関し充分な知識を持っていたに違いない．

「Shippen and Wetherill Tract」出版の数ヶ月前，ライマンは資金調達を始めた．1892年の10月と12月に，伯父エドワードH. R. ライマンから5分の利率で千

第8図　現在のノースハンプトンにあるThe Academy of Music.



第9図　アマースト セイビングズ銀行の借用書.（フィラデルフィア自然科学院図書館蔵）

ドルずつ借り，以後3年続けて1895年1月までに，同率の利子で総計1万500ドルを借用している．伯父ライマンは，ニューヨークに住み，主に絹と茶の輸入で成功して富を築いた．故郷ノースハンプトンの町の中心部に劇場The Academy of Music（第8図）を建て，彼の生まれ育った土地の文化振興に大いに貢献した富豪家として知られている．1891年5月に，劇場の落成コンサートが，ボストンオーケストラとスミス大学音楽部を中心に行われた．世紀の名優エレンテリー，バリモア三姉兄弟，バレンチノ等の演劇ロードショー，バレー，音楽と華やかな興行が20世紀初頭まで続いた．現在は，主に欧米の名画を上映しているが，過去に黒沢明の名画も紹介されている．優雅な建物は，市の誇る文化財の一つである．

1893年3月，アマースト セイビングズ銀行から年利5分，支払いは1月と7月年2回の条件で1万1千ドルを借り（第9図），いよいよS & W tract入手の段取りができた．彼は，せいぜい20年ですべてを清算できると自信を持っていたようである．

これより早く，1891年の春，妹メリーに自分に代わって5歳年上のジェームスへしばらく送金して欲しいと依頼している．彼の兄はハーバード大学法科を卒業し，保険会社に勤めていたが，独仏の語学に堪能な学者肌で，彼に適した法律関係の専門誌の仕事を始め，生活費の一部は遺産やライマンからの送金で暮らしていた．ライマンはメリーに，伯父レスリーの申し出た給料6千ドルを断り，やっと衣食住を維持できる報酬を受け取っていたことを説明した．州の仕事と伯父との縁故関係を考慮し，高額の給料を辞退したのは，ライマンの持つヤンキー良心と云えよう．

『Shippen and Wetherill Tract』の本文の後に，「我々は，シッペン ウェザリルの土地のオプションを有し，間もなく購入を予定．この土地の経営，リース，また，購入したい人は，直接，我々に連絡されたし．ベンジ スミス ライマン　A. D. W. スミス　フィラデルフィア　1月18日　1893年」と広告を掲げ，彼らの炭鉱事業の準備が完了した．

それから1ヶ月足らずで，史上で有名なPanics of 1893（1893年の恐慌）が起った．しかもライマンの地元にあるフィラデルフィア リーディング鉄道の破産が発端となり，多数の銀行，会社が次から次へと倒産した．やがて，燎原の火の如く全米に広がった恐慌は，1897年まで続いた．

その年の最大の痛手は，伯父レスリーの一進一退していた持病の鬱病が，再起不能と宣告されたことであろう．彼はペンシルベニア州地質学の父と呼ばれた．毎回，彼が州に提出する調査費用の予算案が，州議員の絶大な支持で，常に難なく通過すると云われた伝説があり，皆に慕われ尊敬されていた．今回の調査報告は，彼の20年間の調査大要と科学一般論を加える厖大な企画であった．しかし，この大仕事が71歳の彼には余りにも負担となり，遂に挫折を招いた．

ライマンは1895年地質所副長を辞し，ローカスト街に事務所を開いた．秋には，ジョン・R. ネイソンがS & W tractを賃借した．なぜ広告を出してから，約2年近くかかったのだろうか．恐慌，資金難以外に，何か原因があったのではなかろうか．探し求めている中，偶然に一つの資料に巡り会った．

1894年6月14日に，ライマン，スミス，ヒルがサインし

たS & W tractに関する一枚の非公式の契約書の中に，6月15日から10月15日までの4ヶ月間，ヒルに対してS & W tractのオプションを与え，彼が徹底的に30日間炭田の調査，検査をすることに同意し，S & W tractの半分の利権5万ドルの中，2万ドルをヒルが10月15日に支払い，残金は，後日リースと共に決定すると書かれた部分があり，これが鍵ではないかと思えた．

ヒルと云えば，1884年，ライマンの助手安達仁造がペンシルベニア地質調査現場で大変苦労した時，助けの手を延ばした唯一の人であった話を思い出す．彼は，チャールス・アシュバーナの死後，地質調査主任の地位を受け継いだ．地下炭鉱地図を作成させれば完璧で，誰も伍する人なしと云われた．

この契約書の結果を語る資料は入手できなかったが，現場で鍛え，豊かな経験を持ち且つ慎重な彼の実力と人柄を考慮し，1895年にペンシルベニアから，バージニア州の工業都市ロアノークに移転していた事実とを組み合わせると，ヒルのS & W tractの評価が如何であったか想像できるのではないだろうか．

S & W tractに興味を持った人々がいても，投資やリースまでに至らず，ライマンは，ウェザリルやアマーストセイビングズ銀行の次の利子を支払うのにどう工面しょうかと，頭を痛めた．それ故か，伯父ライマン，彼の息子フランクの反対にもかかわらず，使用料，賃貸料を払い，一ヶ月で立ち退く条件を承知した個人経営者ジョン・R. ネイソンにS & W tractのリースを与えたのだと思う．

年が明け，1896年，妹メリー，従姉妹ブルアー，大鳥圭介，日本の助手たちに，ライマンは，“私の小さい炭鉱”の夢をしばしば語った．夏が過ぎる頃から，良質の石炭が産出され，鉄道で送り出されるようになり，ネイソンの予測月4百万トンから7百万トン出荷可能で好景気が予想されるように見えた．しかしライマンは，資金不足，利子支払い滞納で，フランクへの借金が益々増えていった．11月に，ノースハンプトンの持ち家の一軒を，スミス大学に約11万ドルで手放した．

翌年，寒い1，2月は，採掘が遅々として進まず，その上ネイソンの病気，資本不足で石炭産出が低下し，悪化状態が続いたが，ライマンは希望を失わず，4月1日のハンナへの手紙で，ネイソンの予測を期待し，炭鉱事業の成果は多年を要することを語り，理解を求めている．

5月末，ネイソンがS & W tractのリースを売却したいと申し出た．そして，12月に息子サミュエルに炭鉱を任せて，突如，故郷スコットランドへ帰ってしまった．

過去2年間，返金，利子支払いに追われ，フランクから2千ドル，メリーから千ドルと借り，その場しのぎの月日を過ごした．

1898年3月，ノースハンプトン税務署から2百ドル25セント，スミス大学から赤煉瓦の家の利子2百ドル75セントを至急払えと云われ，ライマンは，伯父ライマンか，息子フランクに借金を懇請するほかなく，フランク宛に手紙を書いた．その3月27日付けの手紙を追うように2日後，彼は，再びフランクへ下記の手紙を送った．短い手紙であるが，筆者は読み終わると心の高ぶりを覚えた．

> 昨日出した私の手紙の返事は，もう心配なさらないように，急ぎ書いています．日本の助手たちから思いがけないほど過大な新年の贈り物をもらいました．これで急場をすっかり切り抜けられます．彼らは，私がお金の必要に迫られていることに，全く感づいていません．気づいていたと想像するのは至難です．贈り物は，まさに時宜を得て届きました．もう心配ありません．

妹メリーは，ライマンの良き理解者で，彼への経済的援助を惜しまず，彼が語る助手たち，その家族，日本文化等に興味を持った19世紀の知性ある女性だったと云えよう．彼女への長い手紙は日頃の前文の挨拶を抜きにし，『事実は小説より奇なり』で始まり，ライマンの欣喜，感激，奇跡，希望を語り，誓いで終わっている．

『17日の晩，ミスター シッペンへ払う利子を同封した手紙を投函しました．翌朝，ノースハンプトンの税務署から，昨日までに税金2百ドル75セントを払わなければ，法律手段を取るという，思いもかけない断固たる要求書が送られてきました．それで，大学（スミス大学）に払う2百75ドルの利子を工面する望みがなくなりました．最後の手段として4日前に，やむなく2件の求める額だけフランクか，伯父ライマンに借りようと頼むことにしましたが，フランクが留守なのか，まだ返

事がありません．それで一昨日の昼に，税務署に処分をしばらく待ってくれるよう如何に書こうかと考慮していた時，郵便配達人が書留を届けてくれました．2月20日付けのミスター安達（安達仁造）からの手紙で，12人の助手たちの新年の贈り物，千ドルの為替が同封されていました』また『私達は，今でもあなたから受けたご恩を衷心より感謝しています．私達一同申し分なく暮らしています．』と述べた変わりない助手たちの真心に，ライマンは驚喜し感動した．『安達の手紙で，私がお金の工面で苦しんでいることを暗示する言葉は全くありません．彼に書いた最後の手紙は，去年の8月です．彼らが知ったとは，絶対に想像できません』，タイミングの奇跡を体験した彼は，真に，感に堪えなかった．

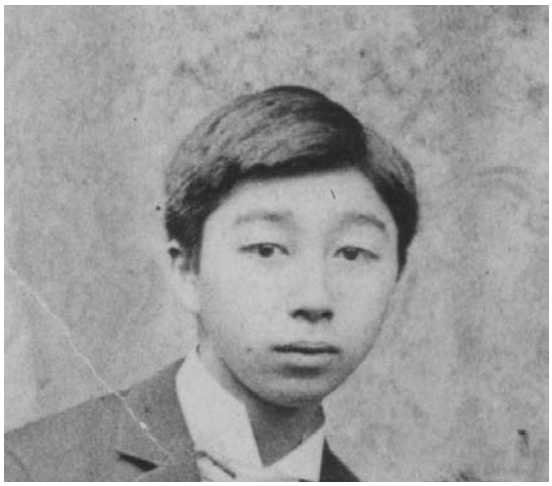
ライマンは，万感の思いで，繰り返し読んだであろう．無神論者と云われた彼は，“運命を支配する子”と兄を呼んだメリーならばよくわかってくれるであろうと，助手たちの贈り物を“特別な神意の出現”と表現した．突然，目の前に現れた奇跡は，ライマンに新しい希望と意力を与えた．たとえ，ずっと炭鉱が売れず，リースができず，地質の仕事がなくとも，どうにかやっていける自信が彼に生まれた．そしてメリーに，S & W tractの改善，生産の増加に努め，過信せず，慎重に仕事を続けることを誓った．

この年の4月，米西戦争が起こり，年内に終わっている．世紀末1899年が明けると，20日に伯父エドワード・ライマンが肺炎で死去した．そして3月13日に兄ジェームスが急死し，4月23日フランクの母が亡くなった．以後ビジネスの手腕家フランクの支援を受け，1917年までS & W tractを所有していた記録が残されている．

5. TOKU（中嶋徳松）の失踪

Tokuの失踪の原因を究明するには，先ず，中嶋徳松（第10図）の生い立ちを書かなければならない．アメリカでTokuと呼ばれた彼の短い人生は，ドラマで始まりドラマで終わったと云えよう．

彼は，明治5年（1872）6月4日江戸で生まれた．ライマンが来日した1年前で，東京横浜間に鉄道が開通し，文明開化の機運が高まってきた頃である．コック秋葉幸太郎が几帳面に毎日記録した家計簿の明治10年5月31日に『別当　竹次郎給金　うまのかいば　13円50銭』と初めて出てくるように，彼の父中嶋竹次郎は，ライマンの別当であった．



第10図　中嶋徳松．

明治9年（1876年）12月に，ライマンは芝大門浄運寺から麹町平河町5丁目17番地に移転した．転居先は元旗本の屋敷で，約1エーカー（約4,000m^2）の敷地に三軒長屋が付属し，一軒に助手の島田純一と賀田貞一夫妻，隣に門番と娘，そして馬屋が付いた一軒に別当（馬の世話をする人）竹次郎と家族が住んでいた．

家計簿にある『厩奴（べっとう）小供　こいのぼり　いわい　3日　1円』は，当時5歳のTokuに鯉のぼりを買ってやり，皆で一緒に端午の節句を祝ったのであろう．皆で揃って新年を迎えたり，団子坂の菊人形を見に行ったりと，ライマンは，このような家庭的な雰囲気を大いに楽しんだようである．

また，彼は，平河町の家に住む人々や通いの人たちの啓蒙に力を注いだ．ライマン家は，代々“独立自尊”の気風を尊び，男女共に幼時より教養を身につけるように教え育てた．祖母の時代に，女性たちが順番で歴史，詩，小説，哲学等々の本を朗読し，縫い物をしながら皆で聞き入った話が伝えられている．

『清書半紙　4帖　8銭，別当　亀吉小供　3人分墨筆　10銭5厘，賀田細君　筆墨7銭4厘，もと　むめ　さわ　浅吉　4人の筆　4銭5厘，手習い半紙一締め　1円30銭・・・』とこの家計簿の学費欄を見ていると，賀田貞一夫人，コック幸太郎，下男浅吉や亀吉，人力車引き，そしてTokuを含む子供たちが平

河町屋敷の母屋に集まり，得所先生の下で，彼らが書道に励む姿が，筆者の眼前に浮かぶ．

Tokuに関する日本の資料は，殆ど皆無と云ってよい．縦約19センチ，横7センチの古びた紙片に「Surugadai Kitakoogai Machi No.1 Hosokawa Junjiro..（数字不明）Nakajima Takejiro (Bettoo) 21 Dec. 1880」と書いたライマンの走り書きを見つけた時は，家計簿と異なり筆者の想像が強くかき立てられた．12月21日火曜日は，正午に工部省のトップクラスの役人に送られて，ライマンが新橋駅から横浜へ出発している．最も忙しい朝であったに違いない．誰が竹次郎の新しい住所を伝えたのであろうか．この紙切れに竹次郎が願うTokuの将来と幸福が秘められていたと思う．Tokuをライマンに預けることはすでに決まっていたものの，その慌ただしい朝，再びTokuを頼むと念を押したのであろうか．明治初頭に竹次郎の身分で，子供をアメリカへ留学させたいと願うことは，全く異例であると見てよい．

ライマンは，和紙で作られた野帳を，時々日記代わりにした．いよいよ荷造りで忙しくなった明治13年（1880）5月16日から1881年5月19日ノースハンプトンに帰郷し，イタリア語と中国語の学習に戻った22日までの記録を，野帳L167にぎっしり書いている．ほんの4ページの短い旅行記である．その中に，離日する12月22日，助手達，コックと“the boy”が東京丸までライマンを送ったと記している．Boyが誰であるか長い間想像できなかった．このBoyこそ父親の新しい雇い主と住所を伝えたTokuであったのではないかと思う．

Tokuは，ライマンの「日本油田之地質及ビ地形図」の完成を手伝うためアメリカへ行く助手賀田に伴って，1882年2月14日に横浜を出帆し，太平洋を渡り，海上16日半でサンフランシスコに着いた．次いで，セントラル太平洋鉄道及びユニオン太平洋鉄道に乗って，大陸横断の長い旅を続けた．ニューヨークで一泊した後，ボストン路線で目的地ノースハンプトンに3月16日の日暮れに到着している．約一ヶ月の旅である．Tokuの目に新天地アメリカは，如何に映ったか想像し難い．ただただ賀田を見失しまいと努力するのが精一杯であったのではないだろうか．この年の1月20日に故国の地を10年ぶりで踏んだ津田梅子が満8歳で岩倉使節団と同行してアメリカにやってきた年令とほぼ同じで，Tokuは9歳10ヶ月であった．

Front View of Our Store upon entering.

第11図　ノートブックの表紙のToku（中嶋徳松）の筆跡（マッサチュセッツ大学図書館蔵）．

彼は到着して一週間余りで，ノースハンプトンの小学校に通い始めた．ライマン家の使用人ではあるが，隣に住むライマンの従姉妹ハンナとファニー ブルアーが，家庭的な面倒をみて可愛がった．Tokuが我が身を家族の一員と思ったのも無理はない．彼の英語は見る見るうちに上達し，成績は優秀，そしてクラスの人気者となった．2年後に助手桑田知明がライマン家に10ヶ月余り滞在した時，Tokuを先生として英語を磨き上げている．教養高いブルアー姉妹によって，エレガントで信仰深い生活を体験し，彼は紳士として育っていった．

1887年7月ライマンは第二次ペンシルベニア地質調査参加のため，フィラデルフィアに移った．Tokuはノースハンプトンで，ブルアー姉妹の監督の下，ハイスクール時代をのびのびと過ごした．そして彼女らの希望通り，ユニテリアン協会の青年グループの指導者に選ばれたのであった．ファニーのピアノ伴奏で歌う彼の賛美歌は澄んで美しかった．誠意ある彼の助言に友達は耳を傾け，彼の差し伸べる救いの手に町の人々は感謝した．夏は水泳，野球，冬はユニタリアン協会を中心とした催しが多く，クリスマスシーズンは，彼が最も活動した楽しい季節であった．

ライマンは，Tokuがハイスクールを卒業後，膝下に呼び，当時アイビーリーグの中でも輝くペンシルベニア大学で勉強させることに決めていた．彼がノースハンプトン ハイスクールの校長にペンシルベニア大学へTokuの成績表を送付してくれと書いた依頼状で，

Tokuに野心が欠けていること，良く云っても怠け者で，活力の不足していることを指摘し，その理由が体を鍛えないからだと述べている．彼が青雲を抱いてアメリカに来た日本人留学生とも彼のノースハンプンの友達たちとも全く違う境遇にあることを，最もよく理解していたのは，ブルアー姉妹であり，ノースハンプトンの人々であったと思う．

ハイスクールを卒業した夏，ライマンに連れられてTokuは初めてフィラデルフィアにやってきた．梶原長八郎や，或時は，ライマンも加わり，大都市の中心部の博物館，公園等を訪れた．歴史を語る古都，碁盤の目状のビジネス街，華やかな商店街はTokuにとっては，広い冷ややかな大都会に過ぎず，ノースハンプトン行きの汽車に乗るたびに，快い開放感を味わい，帰郷の喜びで心が躍った．

ペンシルベニア大学に入学した最初のクリスマスシーズンに，彼が優等生になったというニュースがノースハンプトンに届くと，たちまち町中に広がった．殊に，Tokuの終生の良き相談相手であったメインストリートの本屋のミセス バニスターが，我が事のように喜んだ．Tokuが大学一年を良い成績で終え，往復5マイルを歩いて通学し，心身共にたくましくなっていく彼の成長ぶりを，ライマンは，日本滞在中から親しかったドクター マッカーテーに語っている．父が息子を自慢するような書きぶりである．

時々，ローカスト708番地のライマンの家で日本人クラブのパーティが開かれた．フィラデルフィアに来て間もなくTokuは岩崎久弥，串田万蔵，津田梅子，松尾トキワ等の日本人に会っている．初めての日本人の集まりで感じたのはむしろ孤独感であったろう．当時，彼はブルアー姉妹やノースハンプトンの友達に思いを馳せ，暇をみては手紙を書いている．彼の唯一の楽しみは，ノースハンプトンの人たちとの文通であったのではないかと思えてならない．

1892年の秋，以前日本クラブの一員であった津田モトチカがTokuの母に頼まれたと，ライマンにTokuのアメリカ在学証明書を送って欲しいと云う内容の手紙が届いた．Tokuは，明治5年6月生まれで満20歳，日本男子として兵役の義務がある．留学生の場合は免除され，ニューヨーク在の日本領事館で証明書を出してもらうだけの簡単な手続でよかった．しかしTokuは，人生の転換を迫られた．大事件に直面し，想像さえしなかった厳しい現実を如何に対処してよいか，身近に相談する相手さえいなかった．

その年Tokuとノースハンプトンハイスクールで一緒だった助手桑田知明の甥桑田権平がマサチューセッツ州ウスター工業専門学校を卒業し帰国の途についた．自然，ライマンはTokuの将来を考え始め，彼の文筆の才，雄弁会でトロフィを得た実力，政治学と歴史統計学への熱心な興味，その他の特質を基にし，Tokuを外交官にしたいと考えた．それには法律を学び，日本語をマスターし，日本の知識を身に付けねばならないと思い，先ず卒業後法科に入学することを勧めた．Tokuと再度この件については話し合っているので，ライマンの独断でなされたのではない．

卒業後，Tokuは法科に通うかたわら国際法専門家のパーソンズ教授のオフィスで働いた．やがて日清戦争（1894-1895）が起こり，約一ヶ月後にTokuが書いたThe Corean War（19世紀はKoreanを Coreanと書いていた）が新聞“Times”に掲載された．

翌年の4月28日，Tokuは，ローカストの家を飛び出た．ライマンのショックは大きく，「昨夜突然，着の身着のまま出ていったので，あなたの健康を大変心配しています．適当な住まいがあり，日常の生活に事欠かず，そこで住みたいなら，それはあなたの自由ですが，そうでなければ，戻ってきた方が良いのではないでしょうか．」と翌日Tokuへ手紙を書いているが，さぞ書きづらかったのであろう，多くの文が消されていて，“帰宅を歓迎します．”の最後の文も横線が引かれている．

Tokuの家出の発火点は何であったのだろうか．ライマンのメード マギーが週5ドルもらい，彼が1日25セントである不満，また菜食中心の食事にへきえきした結果といったような些細な事ではなく，積もり積もったわだかまりによって，Tokuは感情が爆発する寸前にいたのではないかと思う．ライマンは，当時59歳，心の根底にTokuは別当の息子で使用人であるとの意識があり，TokuはTokuで自分はノースハンプトンの町で慕われている一個人Toku Nakajimaだという自負があった．お互いに理解し合うことができなかったことこそ，悲劇の原因になったと云えよう．

日清戦争の当初より，ライマンは，日本の朝鮮出兵を良しとせず，戦争反対を唱えた．多少相手によって差はあったが，日本人にもアメリカ人にも戦争観は一貫し，日本は軍国主義，侵略主義を選ばず，小国として，今で云う経済大国となって国の繁栄に力を注

ぐべしと主張した．彼の激しい反対で，在住の日本人とは疎遠になり，1894年の忘年会は行われず，年末は708ローカスト ストリートの家は，火が消えたようにひっそりとしていた．

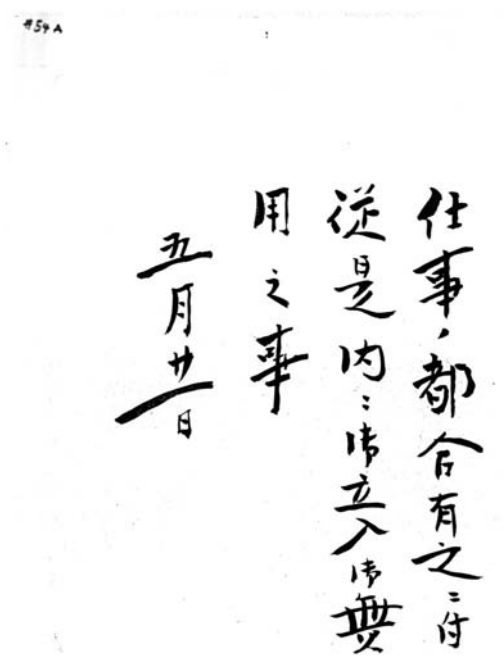
翌1896年の4月17日，日清講和条約が調印されると，月末に，活動家の松本君平がライマンの家にひょっこり現れ，講和祝賀会をやりたいが，参加者が多いので，ライマンの家で開きたいと申し出た．不正且つ非道な戦争と日清戦争を非難していた自分の反戦行動を気にしていたライマンは，諸手を挙げて彼らの頼み聞き入れた．ハーバード時代からの親友サンボーンへ書いた講和祝賀会の描写はなかなか面白い．大略を書いてみよう．

早速日本クラブのメンバーによって招待状が送付され，24人の日本人が招待を受諾した．フィラデルフィアで初めての最大の日本人による集まりであった．サンボーンにTokuも出席したと述べている．余程嬉しかったのであろう．

プリンストンから4人，ベツレハムから海軍士官1人，ワシントン公使館付き海軍武官1人，事務員を伴った若い紳士．彼は貿易商の身分で6週間か8週間ほど隣に住んでいたが，今日帰国した．どうも使命を帯びてやってきた日本政府の技師であったようだと書いている．そしてご婦人．間もなく帰国する予定の5，6人の日本クラブのメンバーの送別会を兼ねていた．日本語や英語で次から次と語る演説は，戦争と平和に関したもので，パーティは次第に盛り上がっていった．演説が終わると，三味線を弾いての歌や踊り，パントマイムその他ゲーム等の華やかな舞台に変じた．最後に皆で君が代を斉唱し，大祝賀会は午前1時頃幕を閉じた．

勿論ライマンも演説した．彼は皆の演説が過激で熱烈な愛国的な内容であるだろうと前提し，公平かつ冷静な演説草案を書き上げた．しかし彼の平和の信念はまげていない．「仕事ノ都合有之ニ付従是内ニ御立入御無用之事　五月十一日」の張り紙（第12図）をドアに貼り，何回となく草案を書き変えるライマンは，心より日本を愛し，東洋を愛していたと思う．

勝利の祝辞は，御目出度の祝言に続いて「勝って兜の緒を締めよ」の名言を引用し，平和と将来の警告を基にした内容である．終戦は新しい戦いの始まりであり，敵の勇気，能力を見くびらず，己の勇気を過大評価するなと勝者の奢りを警告した．漢人をあ



第12図　この張り紙は草案執筆のためドアに貼られた（フィラデルフィア自然科学院図書館蔵）．

などってはならない．かれらは，勇気や能力があったにかかわらず，近代兵器が無かったため敗れたのだと述べ，ライマンは，眠れる中国が将来目覚めることを19世紀末にすでに信じていた．日中が二度と再び戦わず，敵視せず，お互いに助け合い，外国の不正を防ぐよう願い，最後に，Shikai ika四海一家のためと祝杯をあげた．

日本が清国に大勝し，富国強兵の政策の下，軍事化が本格的になると，列強の日本への関心が高まったのは当然であろう．フィラデルフィアの文化団体も例外でなく，進歩的で知識人たちの集まるコンテンポラリークラブで「日本政治の展望」の議題で討論会が行われた．約300人の聴衆の中には，女性が多く，また他州からの日本人も出席した．ライマンは，ニューヘブンからやって来たMr. Yokoiと熱烈な議論を交わした．日朝清の歴史事実を述べ，日清戦争の起因，勝敗の原因等を語り，東洋に全く無知な聴衆に正しい知識を与えることが彼の目的であったが，ライマンが反対側の立場で討論したのだと聴衆に印象を与えたらしく，討論会は事なく終わった．

ライマンが可愛がったコック秋葉幸太郎へ日本語で書いた手紙に見られる日清戦争観は短くわかりや

すい.

朝鮮ノハウノセンサウハ　ワタクシガヨホド　コマリマシタ　ワタクシハ　日本人ヲスキ　ヤハリシナ人ヲスキ　マタ朝鮮人ヲスキマス　シカシテ　イクサヲスコシモスキマセヌ　オホカタ　オロシヤバカリ　アルイハ　英国　ヤウヤクコノイクサカラエキヲウケトリマスト　ハジメカラカンガヘテヲリマシタ

手紙の日付けは，明治29年（1896）1月16日である．この頃，三国干渉の痛手をこうむり，日本国内に不満が広がっていた．「イクサヲスコシモスキマセヌ」はライマンの確固たる信条で，2年後に米西戦争が起こった時も，一人のアメリカ人として時々興奮して戦争を支持しているが，戦争の愚を非難し，四海平和の願いは不動であった．

ライマンの1月26日付の桑田権平への手紙で「Tokuが10日前に，1430　サウス　ペンシルベニアスクエアの弁護士の家に，住み込みとして移転した．」と知らせている．Tokuが何時ローカスト ストリートへ戻ったのか，資料がないのでわからないが，今度こそライマンの家を出て行き，これが二人の永久の別れとなった．しかし，これも確実な資料がないので，断言はできず，目下探索が続いている．

それから1年足らずして，1897年の4月，ライマンが何時ものようにノースハンプトンから送られてきた地方新聞を読んでいると，Tokuの名が目に入った．彼がブルアー姉妹の家に住んでいるではないか．ライマンにとって，正に青天の霹靂，目を疑うばかりであった．ショックから覚めると，早速Tokuにブルアーの家を出るように命じ，帰国した日本人を中心に，あちこちへTokuの就職を斡旋して欲しいと，激しい運動を開始した．

（佐治健治郎氏に梶原長八郎に関する資料提供および執筆していただき，厚くお礼を申し上げます．）

引　用　文　献

佐川栄次郎（1921）：ライマン氏を憶う，地質学雑誌，vol.28，no.328，40-54.

賀田貞一述（1884）：米国地質測量紀事，東京地質協会報告，v.5，no.9，p.16.

FUKUMI Yasuko（2006）：A noto on Lyman（21）.

＜受付：2005年12月1日＞